

ある日突然、「小悪魔ガールになりたいの〜」と、
兄である俺に宣言してきた妹の




緒花。

……どうやら小悪魔ガールとやらは
男を手玉に取りリードできるような女のことらしい。
モテカワ小悪魔ガールになるには、
エッチの知識が必要不可欠なんだとか。

そして、どう勘違いしたのか、
俺のチンコ、さらには勃起と射精を
見せると強要してきた。

しばし唾然としていたが、
妹好きの俺はまたとないチャンスだと思い、
緒花に勃起したチンコと射精を見せてやった。





そこまでされて、
嫌がる素振りすら見せない緒花。

もしかして、コイツにはもっと凄いのことをしても
文句を言わないんじゃないか……？

そう思った俺は、
妹を

(俺好みの)

小悪魔ガールにすべく
エッチな特訓を開始させる――。

いざ、特訓開始――。

まるで恋人のようなキスをし、
そのまま緒花のヴァーシジンまでいただいたってしまった。

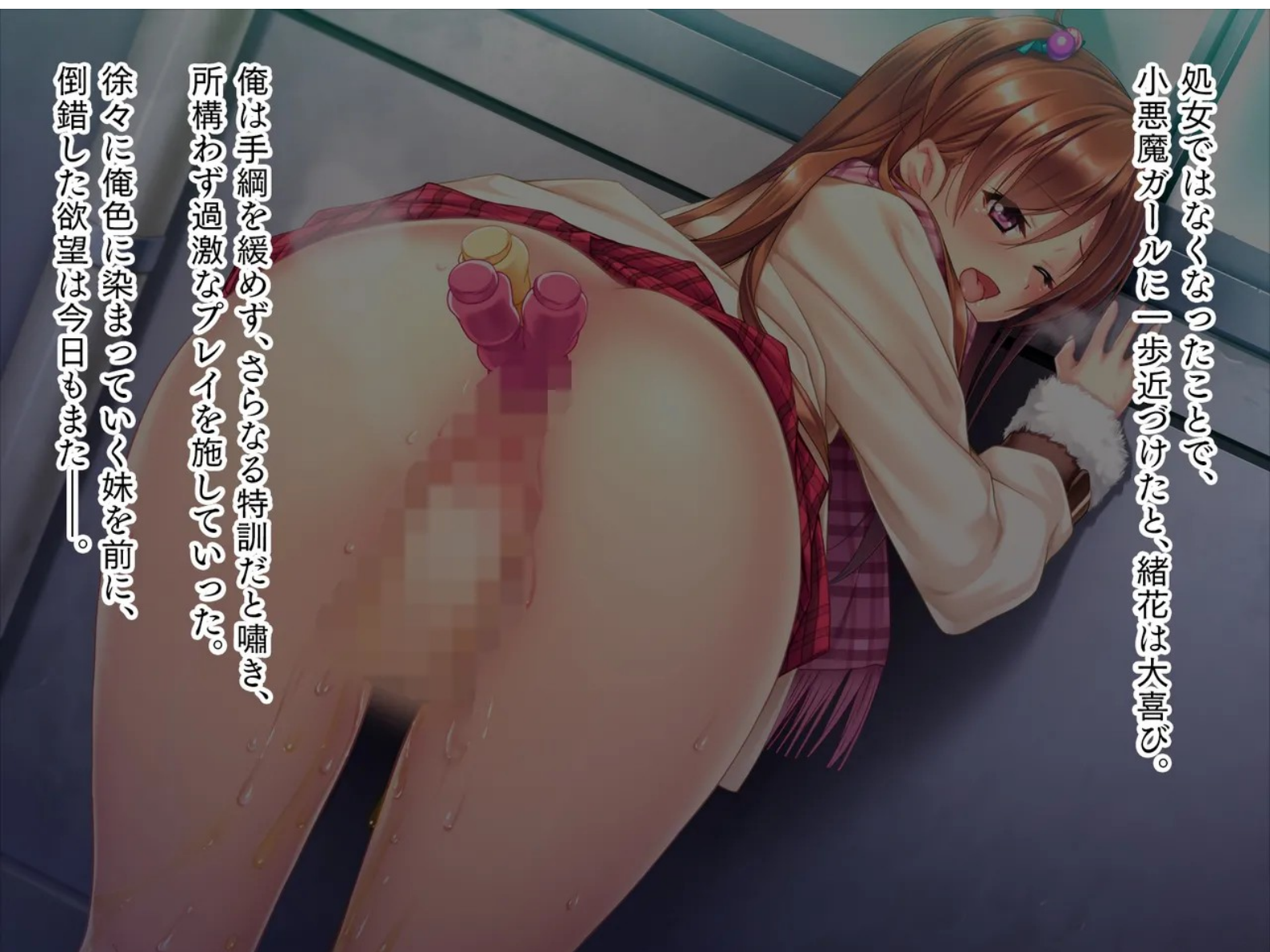
抵抗するどころか、
初めてのセックスで感じまくる妹に興奮し、
俺も数発の欲望を発射した――。



処女ではなくなったことで、
小悪魔ガールに一步近づけたと、緒花は大喜び。

俺は手綱を緩めず、さらなる特訓だと嘯き、
所構わず過激なプレイを施していった。

徐々に俺色に染まっていく妹を前に、
倒錯した欲望は今日もまた――。



目隠しフェラ

「んー……イキだもんなロトやるのー……？」

「お前」

「お前」

「お前、初めて見たとき

男性器のニオイに戸惑ってただろう？

これはそれに慣れる訓練だ」

「わかったらさっさと嗅げ」

そのために、緒花には目隠しをつけさせたのだ。

「くんくん……うう、やっぱりクサイー……
くんくん……うえええ……」

「これが男性器のニオイだ。しっかり覚えろよ」

「はぁーい……くんくん……」

うう、吐きそうなんだケ下お……くんくん……」



「うう、こんなの慣れるわけないじゃない……
くんくん……どれだけ嗅いでも、クサイだけだし……」

ん

ん

「うーむ、そうか……それじゃあ仕方ないな。
おい緒花、少しだけ口を開けてみる」

素直に、緒花が軽く口を開けようとしたその瞬間――。

「んむっうっ……おにーひゃんこくくひゃらー……
んむっうっ……おむひゃめら……！」

んむっ

「こっちの方がニオイが強いぶんすぐに慣れるだろ？
ほら、鼻で呼吸してみろ」

「んむっうっ……すううー……んええええっ……！」

「唾液をたっぷり口の中に溜めて俺のモノを洗ってみろ。
そうすれば匂いもなくなるかもしれないぞ」



「ううー、ありやうっへ言われへもお……んんんう……
ろーしゅればらーのお……っ」

「はぁ、はぁ……どうだ、

そろそろニオイや味にも慣れてきたんじゃないか？」

「んうう……きよんなの、しゅぐに慣へないよお……」

んっ

んっ

「なんだ、まだそんなに臭いのか？
よおし、じゃあこういうのはどうだ？」



「ふふふ……」

臭い臭いとらるお尻から、鼻を插んでやったのだ。

ふふふ
ふふふ

「ふふふ、どうだい？ これなら苦しくならだらう？」

「ふふふ…… ふふふ……」



「おにーひゃろ……んくろ、るりゅひるろ……！
じゅぞぞろ……！」

「はぁ、はぁ……！」

「そのまま吸ら付らしてよ……！」

んっ

んっ

もう少し緒花に任せようと思っていたが、
もう我慢できない。
緒花の鼻をしっかりと摘んだまま、腰を動かしていく。



「んんぐらうらうら……!? じゅぶっ、
じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶるっ……!」

「はあっ、はあっ、ららぞおっ!
見事な吸いつきだっ!」

じゅぶっ、
じゅぶっ

じゅぶっ

身体を引こうとする緒花だが、それは許さない。



「〜だの、ささぎの調子だの〜」

「〜のEE〜のうん〜」

「〜だの、ささぎの調子だの〜」



「んんんんん……!? んんんんん、んんんんん……!」

「くっくっくっ!」

「どうだ、兄ちゃんのザーメンシャワーだぞ!」

んんん


びちゃ

びちゃ

んんん

射精半ばで腰を引いて、
緒花の整った顔に向けて射精する。





大人しく従い、緒花がその喉を鳴らしていく。

おお、素晴らしい……。
妹が兄ザーメンをゴックンしてる姿も悪くないな……。

玄関で妹の足コキ

スニーカーを脱ごう……として、
そこで初めて緒花の足元に意識が向いた。

「あれ、お前そんな靴持ってたか？」

「あ、コレ？ こないだ買ったんだー。
あったかいんだけどチヨリ蒸れるんだよねー」



緒花がブーツを脱いでいるところを、じつくりと観察する。

……もともと候補の1つとして
足を使うことは考えてはあった。

躊躇なくズボンを下げ、
そのまま廊下の床に仰向けに寝転がる。

「……？」



まだよくわかっていない緒花に指示を出し、その結果……。

「ママ、ママでこんなのでコーフンするのー……?」

「ぐふふ、当たり前だろう……くんくん」

ニ
に

「ちよつ、脱いだばっかのブーツ嗅ぐなし……
つてゆーかクサいだけでしょー……?」



ムワツとしている緒花のブーツに鼻をつっこみ、
その香りを堪能する。

「ずー、はー……」

「ああ、堪らんなあ……ぐふふっ」

「うわ、マジでガチガチになってきたし……
えーっと、これを足で触ればいーんだよね……」



スリスリ、と俺の肉棒を足でくすぐってくる緒花。

「ん、よっ……思ったよりもズイかも……
でもこれって、マジで気持ちいいの……？」

「ああ、もちろんだとも。しっかり感じているぞお」

「うげー、理解できないんだケド……
んっ、しよっ……男子ってみんなそーなのかなあ……！」



「緒花、もつと上下に扱くようにしてくれ」

「んーつと……こんな感じかなー……んしょ、んしょっ」

「おおっ、堪らんっ……」

しゅっ
しゅっ

シユツ、シユツ、と緒花の足が上下に動きだす。



いっ

「ひゃっん！ おにーちゃん、
そんなビクビクされるとくすぐったいんだケドー？」

「お前の足が気持ちいいからだぞ……はあ、はあ」

「はあー？ もー、なにそれマツでキモーS……」



「んふふー♪ うりうり、こんな感じかなー？
んしょ、んしょとー♪」

「おおつ、凄じつ……
上手だぞ、緒花っ」

ぐんぐん

んしょ

ただの上下運動だけでなく、挟む力を変えたり
左右交互にスリスリと擦ってきたりと変化を与えてくる。



「おにーちゃんって、エッチのときすっごく嬉しそうに
キツイって言うってたよねー。足だとこんな感じ？」
「うおおー……?!」

肉棒を、かなりの力で挟まれる。
しかもそのままシロシロと上下されてらさる。



「わっ、透明なヌルヌルがいつぱい出てきたっ！」

「うっわあー、タイツがベトベトなんだケドー」
「もー、ペンションしてよねー？」

「お、お前がいきなり強くするからだろっ」



「んふふー、そんなコト言つてもいいのかなー？
それっ、それっ、それっ、それっ♪」

「お、緒花っ……
ちよつと強すぎるっ」

くちゅ

しゅわ
ぐりぐり

「えー、聞こえなーいっ♪ それっ、それぞれそれーっ♪」



「あ、ああ……くうっ！ もうそろそろ、出そうだっ」

ぬちゃ

ぬちゃ
ぬちゃ

ぬちゃ

「へー、そーなんだー♪ おにーちゃん、
足でヌルヌルされてるだけなのに
シャッセーしちゃうんだー♪」

「いいよーっ、足で、シャッセーしちゃえっ♪
それ、それぞれそれーっ！」

(3/3)

「おーっ、ぬちゃーっ」



「きゃんっ!!」

「うわっ、チヨー出てるっ
それそれっ」

みあん

ミヤノ

ミヤノ

ミヤノ

「くっくっおおっ……」



射精中もニユルニユルと肉棒を扱かれて、
射精の波が絶えず襲われてしまう。

ニユルニユル


ニヤッ

伊藤

「おにーちゃん、まだ出るっ？
えいえいえいっ……
ってうわっ、
マジで出てきたーっ」

「お、緒花、やめろっ……んんんっ」





楽しそうに足コキを継続してくる緒花に、
射精中の肉棒はあっさり屈服して……。

俺は、まるでそういう玩具のように
緒花にザーメンを搾り取られ続けるのだった……。

妹相手にゴムなしセックス

「特訓を始めるぞ」

「えーっ、もうお風呂入っちゃったし汚れるよーなコトしたくないんだケドー」

「大丈夫だ、風呂を使う予定だからな。どれだけ汚れてもすぐに洗い落とせるぞ」

「うわ、汚れるの確定なんだ。それに、おにーちゃんにハダカ見られるのもヤなんだけどなあー」



「安心しろ、お前は水着でいい。
ちゃんと俺が用意したから」

「えっ、そーなのっ？ もし、だったら先に言っ
てよねー♪
んふふ♪、新しい水着ゲットできるとかラッ
キー♪」

「さ、行くぞ」

「はーっ♪」

スキップしながら緒花が俺についでくる。
さあで、上手くいくかな……ぐふふっ！



「うひゃー、なにこれヌルヌルしてるー」

「ローションだ。気持ちいいだろ？」

ふふっ

ぬる

ぬる

「気持ちいいってゆーか、なんか面白いかもー」



緒花がその柔らかい身体をムニユムニユと寄せてくる。

「ってゆーかさー、コレのどこが水着なワケー？
こんなのただのヒモじゃーん」

「お前だってウケるーとか言つてノリノリで着ただろ。
海外なんかでは普通に使う人もいる
ちゃんとした水着だぞ」

ぬる

ぬる

んっ



「ウツツ、マジでーっ？　じゃあ、おにーちゃんは海外に行かないほうがいいねー」

「こんなにガチガチにボッキしちやってんじゃーん♪　こんなので歩いてたら、すぐタイホだよー？」

「やっちゃん」

「んっ」

「まあ、たしかにそうかもな……ぐふふっ」

「やっちゃん」



「うりうり〜 ほーら、もうビクビクしてるし〜」

「そのまま胸でヌルヌルと擦ってくれよ」

「へー、足の次はおっぱいなんだー？」

「いーよ、シャッセーさせてあげるねー」

わっ

ぬちやっ

ぬちやっ

緒花は嫌がる素振りも見せずに身体を上下させ始めた。





「んしょっ、んしょっ……はい、こんな感じー？」

「ああ、いいぞお……その調子だ」

「んふふー、やっぱりエッチなコトってカンタンかもー」

ぬちやっ

ぬちやっ

ぬちやっ

ん

ん

緒花の乳房からみぞおち付近までを使つて、肉棒をニユルニユルと擦られていく。

「んしょ、んしょ……」

おにーちゃんの、なんかチヨイ暴れてるんだケドー、これって、そんなに気持ちいいの？」



「ああ、最高だ……はあ、はあ……」

このままじゃ、またすぐ射精しそうなくらいだぞ」

「なにそれ、キモーいっつゝ おにーちゃんって、

エッチなコトしてるとすぐシャッセーしちゃうよねー」

「んしょ、んしょーつと」 どうぞ、

もうそろそろシャッセーしちゃいそうなんじゃないのー」



「い、いやまだだな」

「ふーん、そーなんだー。」

「じゃあ、わたしホンキ出しちやおっかなー？」

ぬちゃ...

ぬちゃ...

ぬちゃ...
ぬちゃ...

「ほ、本気だと？ ふふん、やってみろ」



「それっ！ 緒花スペシャルっ♪」

ズシッと、緒花が俺の股間に全体重を乗せてくる。

「ああ、たまらんっ……………」





体重を乗せたまま、緒花の身体が大きく滑る。

「そしてここから……緒花スペシャル、ツーツ」
「お、お、おとおおっ……!!」

んっ

んっ

おっ

んっ

「あははっ♪ ヤバーい、チヨール楽しーんだケドーっ♪
そーれっ、そーれっ♪」

「おっ、おっ、おとおおっ……！」

「まだまだいくよーっ？ そーれっ、そーれっ♪」

は、

んっ

に に

「あ、あぁっ……もう、田んぼっ……！」





「あ、あああーっ！ 田んぼっっっっっ！」

「いーよ、イッちゃえイッちゃえーっ！
それっ、それっ、それっ、それえーっ♪」

最後に1回、大きめに擦られたその瞬間――。




「ほーら、もつとビクビクしちやえー♪
ほらほらほらー♪」

「あぁっ、そんなにされたら、またっ……くううっ！」

おしり

おしり

120
1/10



射精中の肉棒をヌルヌルと刺激され、
連続で射精を迎える。

そんな俺の肉棒を、
緒花はキラキラとした楽しそうな笑みで
見つめており――。
射精が終わるまで、
ずっとその身体を擦りつけてくるのだった。

そして、
射精が落ち着いたところで、マットをどかす。

「よおし、交代だ。今度は男に触られる特訓をしようっ」

「ひゃんっ……!? お、おにーちゃん……!?」

ハレィ

ま

「ぐふふ、逃げるんじゃないぞ」





「や、やだっ……ひゅんっ……おっぱい、
触るなんて聞いてないんだケドっ……」

ふいっ
ふいっ

「おいおい、今言っただろう？ 次は男に触られる特訓だ」

「もーっ……やつ、揉んじゃダメっ……
ひうんっダメだっばあっ……ひうんっ」

「どうした、耳まで真っ赤だぞ……？」

緒花の耳に唇を寄せて、
触れるか触れないかのところでボソボソッと囁いてやる。



「やんっ……!!? み、耳、やめて……!」

「なんだ、緒花は耳も弱いのかあ……?」
「よおし、だったら……こういうのはどうだ?」
「真っ赤になっている小さな耳に、舌を伸ばす。」





「ひゃんっ……………！ やだっ……………耳、
ダメだってばあっ……………あっ、あっ……………！」

「どうだ、ゾクゾクするだろう？ レロレロッ」

「あ、あっ……………マジで、ダメえっ……………ふあっ、ああっ……………！」

「ひぁあんっ……………!? 先っぽも、ダメえっ……………!
耳といっしょにされたらっ、ビリビリするうっ……………
あっ、ああっ……………ふぁあっ……………!?」

「ピチャ、レロレロオッ……………
ああ、可愛いぞお緒花あ……………!」



「やあつ、ふあつ……ダメつて、言ってるのにらっ……
ふあつ……あああつ、ひあんつ……！」

ムワツと香ってくる、どこか甘さのある汗のニオイ。
兄である俺の手で、妹の身体が発情してきたのだ。



「ふう……よし、ストップだ」

「あ、あ」

「あ、あ」

「あ、あ」

「あ、あ」

「……なあ緒花、これ、挿れさせてくれないか？」
「はあ、はあ……もう、ダメって言うてるじゃあん……」



「ダメに決まってるじゃん……
だって、コンドーム持ってきてないでしょ……」

ぷに
ぷに

「まだ教えてなかったが……セックスするのは
生でしたほうが何倍も気持ちいいんだぞ？」

「えっ……!？」

おま

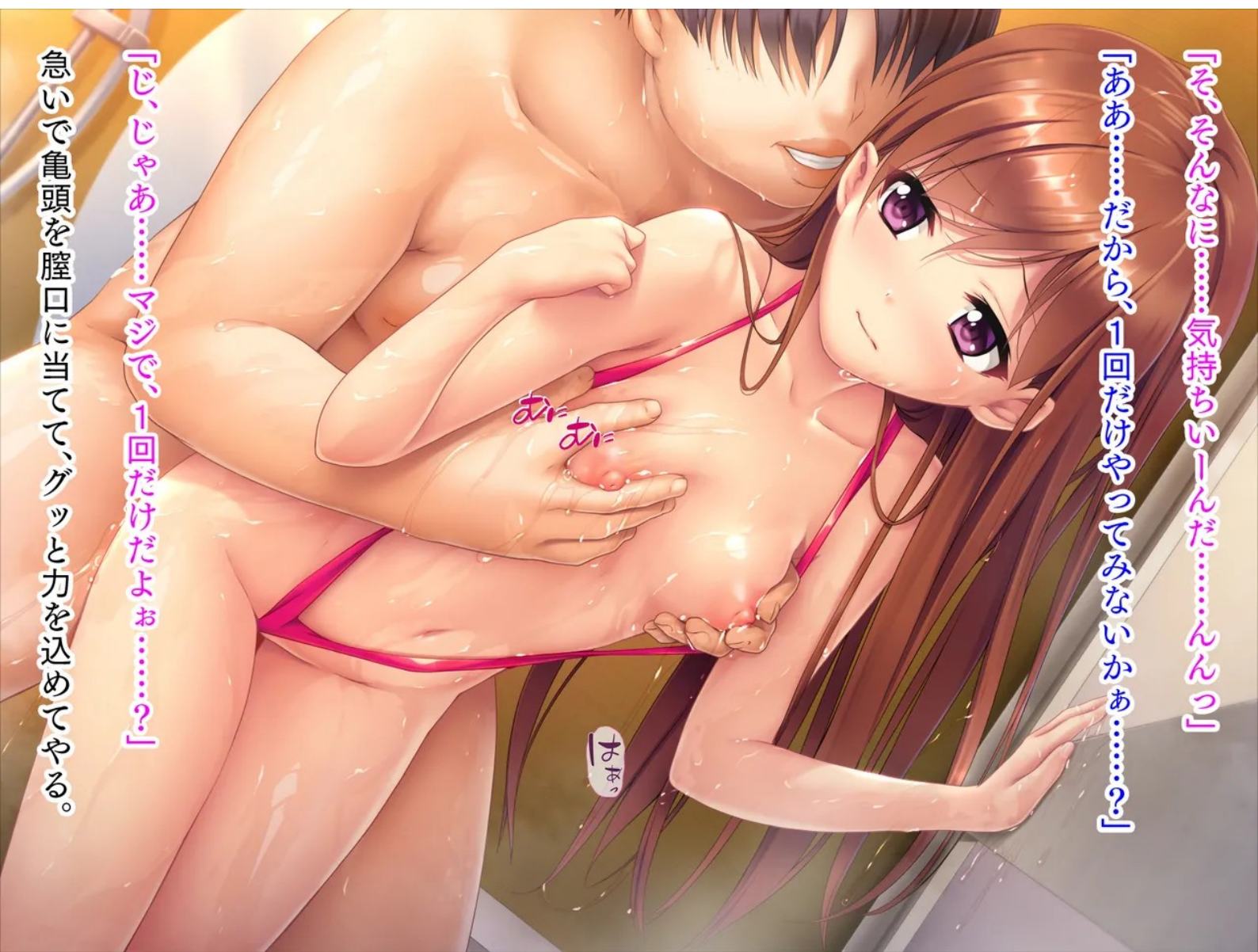


「そ、そんなに……気持ちいいんだ……んんっ」

「ああ……だから、1回だけやってみないかあ……？」

「じ、じゃあ……マジで、1回だけだよお……？」

急いで亀頭を膣口に当てて、グッと力を込めてやる。





「う、うおおっ……熱いっ……!？」

「あっ、あああああっ……!？」

「あーっ」

「スズッ」

「スズッ」

「なに、これえっ……ぜんぜん違うっ……
あっ、あめあめ……」

「くううっ、堪らんっ……」

俺のモノを容易に根本まで受け入れていた。



「はあし、はあー……んんっ……マ、マジで……
コンドームなしで入れちゃった……」

あ

「んんっ……！」

「やっ、動かないでっ……」

「はあっ、んううっ」

ぐり
ぐり

ぐり
ぐり
ぬぶ

やっ

俺は、ついに妹との生セックスを実現したのだ……！！

「はあ、はあっ……もう、ダメっ……あっ、んっ……
そんなにグリグリされるとっ……わたし、もうっ……」

「お、おにーちゃあん……
はあ、はあ……
1回だけ、なんだから……
ちゃんと、してえ……っ？」

「はあっ、はあっ……ああ、いくぞっ！」





「あんっ、ああんっ、きゃあんっ！ これっ、マジでっ、
ヤバすぎるうっ！ あんっ、ああんっ！
こんなのっ、もう忘れられなくなっちゃううっー！」

「俺もだっ！ たっぷり
出してやるからなっ！」

「だめっ、だめだからねっ!? あんっ、ああんっ！
このまま、中に出しちゃダメだからねっ!?!」

やっ

ふっ
ふっ
ふっ

はっ
はっ
はっ

はっ

「だめえっ！もうわかんないっ！なにがだめでっ、
なにがいいのかあっ！もうわかんないよおっ！」

「ああっ、あああああっ！
出るっ！」

「あああっ、もうらめえっ！いくっ、いくううううっ！
あっ、あああああああああああああっ……!!!」





「あ、あああああああああああつ!!」

甘
あ
あ
あ

エ
レ
レ!

エ
レ
レ!

ズ
ン
ズ
ン
ズ
ン
ズ
ン

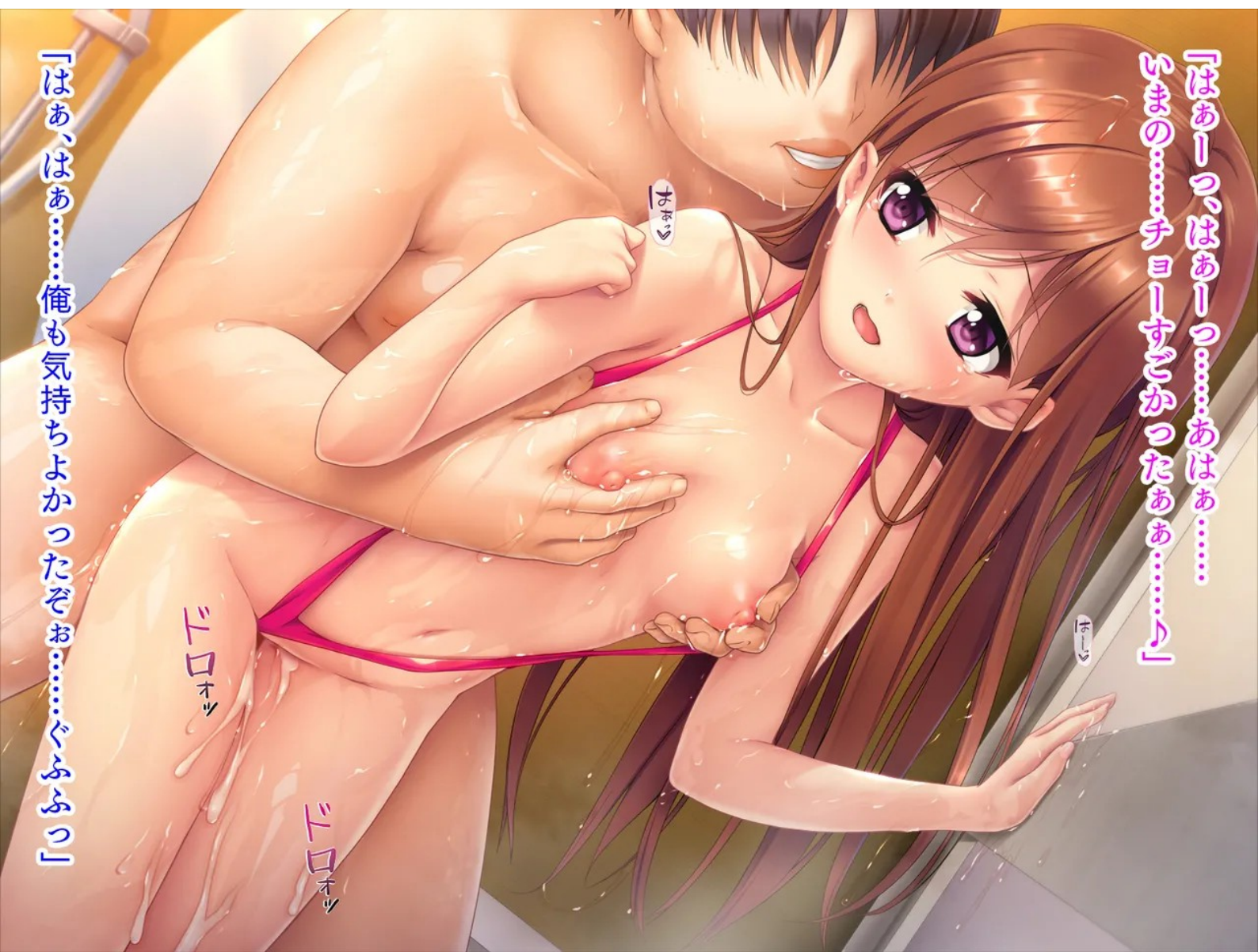
ズ
ン
ズ
ン

ズ
ン
ズ
ン

俺の射精に反応して、膣内もまた繰り返して収縮している。
どうやら、緒花も繰り返して達しているようだ

本当に長い時間をかけて、
ようやく子種の放出は止まった。





「はあーっ、はあーっ……あはあ……
いまの……チヨースごかったああ……っ」

「はあ、はあ……俺も気持ちよかったぞお……ぐふふっ」

「はあ」

「はあ」

「トロッ」

「トロッ」

「なあ緒花、もう一回しようぜ」

「んっ、はあっ……おにーちゃん、だめだよお……
はあ、はあ……わたし、まだイッたばかりだからあ……♪」


「べつにいいだろ？」

「もう一回だけでいいから、な？」

「もお……」

「おにーちゃんの、ヘンタイさ……♪」

「よおし、らくぞりー」



ウツトリしたまま、
キョんキョんと2回だけ強めに
アソコを締めつけてくる緒花。
了承の意味だと判断し、
俺は再びググッと腰に力を込めた。

妹のフェラチオとアナル開発

生ハメにも中出しにも抵抗がなくなった緒花は、よりいっそう行為に積極的になっていった。

「じゅぶっ……んぶっ……じゅちゅっ……ちゅっ……ん」

「おお、いいぞお……上手くなったなあ緒花」

もちろん、それらが全て

小悪魔ガールになるために必要なのだと疑っていない。

ここはカラオケボックス——
制服姿なのを見てもわかる通り、緒花はまだ学校帰り。

「ちゅり、ちゅり、ちゅり……おぼり……
はむり……じゅるり、じゅるり……」

「緒花、ちよりとこいつち向いてみる」





「ぐふふ、美味そうにしゃぶるようになったじゃないか」

「らってえ……じゅるっ、じゅるっ……」

「これ、おいひーんらもん……ん」

あま

あま



「わらひ、これスキになつひやつらかも……♪
……おいひーのが濃くなゆの、たのひー……♪」
「そうかそうか、これからも頑張ろうな？」

「ふあーい♪」

「じゅるじゅる……ちゅるちゅる……ろろろろ……
んごうりり……ちゅぱりり……じゅるりり……ん」
「おお……んごうりり……たまるんなあ……」

天井を見上げながら、緒花の口奉仕に身を任せていく。



「ん……？」

おん



緒花が、
俺のモノを啜えながら尻をモジモジとくねらせている。
……どうやら、疼いてきたようだな。
そろそろ、こつちも出してやるとしよう。

「おい、緒花」

「じゅるり、じゅるり……んん〜?」

「そろそろ出してやる。顔が口、どこがらら〜?」

「じゅるり、じゅるり……
今日は、お口がらら〜?」

じゅるり

じゅるり





「じゅるっ、じゅずっ、じゅぽり……！
じゅぞろっ、じゅるるっ、じゅちゅるるっ……！」
「おおっ、いい吸い付きだっ……くううっ！」

すげえ
じゅぽり

じゅぽり



「……………」

んんん

んんんんん

んんん



「あんなに……うん……うん……うん……
うん……うん……うん……」

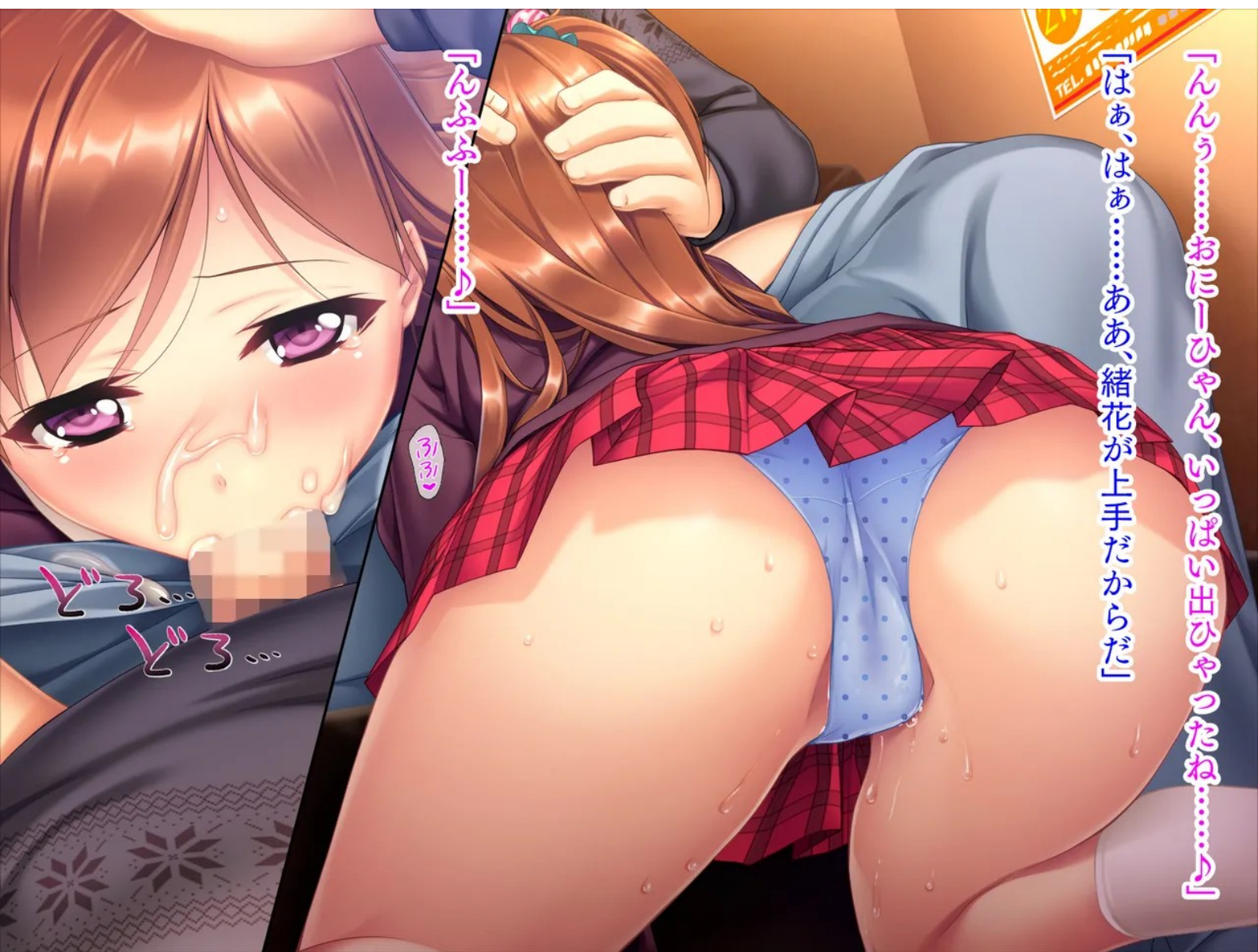
「うん……
そのお尻を吸う……うん……うん……」

うん

うん
うん

うん

うん……うん……!



「んんう……おにーひゃん、らっぱい出ひゃったね……」

「はあ、はあ……ああ、緒花が上手だからだ」

「んぶー……」

あは

どろろ…
どろろ…



「それじゃ、おそーじすゆね……
じゅるっ、レロレロ、じゅぶぶっ……♪」
怒張を舐めしゃぶりながら、物欲しそうに揺れている。

16

「まだこんなものじゃ足りないからな。
今日もアレやるぞ、テーブルに乗れ」

「ふぁーい……ん」

そのままスルスルとパンツを下ろし、
俺にケツを向ける格好でしゃがみこんだ。



「はい、おにーちゃん……..
ちゃんと見えてるー……っ？」

「ああ、バッチリだ」

ぼっ

3/3



「ちー」

緒花のアナルには、
極太のアナルパールが
取っ手の部分まですべて入っている。

「さあ、今日もいつものをやらうか」

「はー……それじゃ、しっかり見てね……」



「んんっ……！」

「よしよし、出てきたぞお」

んっ……

んっ……

おちっ

おっ
ん

緒花が力むと同時、
アナルパールの取っ手部分がヌルンと顔を出した。



「はあ、はあ……
いいぞお緒花……」

「んんっ……! はあっ、はあっ……
あと、ちよつとおっ……んんっ、んんくううっ……!」

おちっ

おちっ

んっ……

ひとときわ強く、緒花が力む。
それと同時に、ググツと肛門が広がっていき……。



「んっ、んうんっ……!?
で、たあっ……はあっ、はあっ、んんうっ……!」

んっ...

あはっ

んっ...

「ほら、今日こそ全部出しきるぞ。頑張れ」



「う、うんっ……はあっ、はあっ……
んんっ……！
んんっ……！」

「あ、あ」

「あ、あ」

「んんん」

あと少し、あと少し、という感じを何度か繰り返して、
そこから「一気にグググッ」と肛門が広がっていき……



「はあああつ……」 はあつ、はあつ、はあつ……
やっと、出たああ……」

おせい

は

「ぐふふっ、よくやったぞお緒花……」



「はあ、はあ……わたし、ついで
お尻でしちゃうんだあ……」

お尻

47

「ああ、ほらもつとケツ上げる」

お尻

「はー……ヤバい、チヨードキダキする……」



「ひあぁっ……!!? あっ、あああぁっ……!!」

「おおっ、キツっ……!!」

「あぁっ」



ズブニッ

ぬぶぶ...

あぁ

「はあっ、はあっ……おにーちゃんっ、コレ、
ちよつと苦しーかもおっ……」

あ、

あ、

「すぐ慣れるだろうから、我慢しろっ」



「んあつ、ふああつ……おにーちゃん、
まだダメえつ……マジで、苦しーからあつ……」

「すぐに慣れるから、
我慢しろっ」

「ガマンって、言われてもおつ……！
ふあつ、んあつ……
こんなの、お尻こわれちゃうよおつ……
あああつ……！」



「はあっ、ああっ……なに、これえっ……あんっ、ああっ……なんか、お尻おかしいっ……あっ、ああっ……」

「どうだ、気持ちよくなってきただろう？」

ずぶっ

ずぶっずぶっ

ずぶっ

「よく、わかんないっ……ひあっ、ああんっ……わかんないけど、ソクソクするうっ……あっ、ああっ……」



「ひああんっ……!? そんなっ、いきなり強いらっ……
あんっ、あっ、ああんっ……」

「どうだ結花っ、痛くないかっ!」

「わかんない、のおっ……!! お尻、
ズブズブってされるたびにっ、ゾクゾクきてえっ……
あんっ、ああんっ……!! 頭、おかしくなるうっ……!!」



「おにーちゃんっ、これっ、これダメだつてえっ……
ゼツタイ、お尻ヘンになるうっ……！」

「いいじゃないか、
変になつちまえよっ！」

「こんなの覚えちゃつたらっ、ああんっ……！
わたしっ、トイレするたびに思い出しちゃうよおっ……！」



「ああんっ、そこっ、そこヤバイいっ……!!
お尻、ホントにヤバイっでええっ……!!」

「らめっ、もうらめえっ……あんっ、きゃああんっ!
お尻なのにつ、わたしっ、イツちやいそううっ……!!」

「いらぞ、イツてしまえ!
こっちも出してやるからなっ!」

あ
ほ
あ
あ

あ
ほ
あ
あ

ほ

あ

あ





おきっ

「あああつ……!! お尻の中、おにーちゃん熱のが
ピューツと出てりゆううつ……!!
あつ、あああああつ……!!」

「ああ、まだ出るぞっ……そらっー!」

Alt777

Alt777

Alt777

Alt777



「ひああんっ……!? 出すのらめえっ、
またイツちゃうっ、イクっ、あっ、ああああああっ……!」
たっぷりと注ぎ終えたところで完全に落ち着き、
俺はゆっくりと肉棒を引き抜いた。

ひい

ひい

ひい
ひい

ひい

あ

「あああんっ……♪ はあ、はあ……
うわあ、お尻からなんか出てきてるう……♪」

「おはっ」

「おはっ」

「おお、凄い量だな……」

我ながらかなりの量を出してしまったようで、
次から次へと出てきているのにまだ止まらない。

ドロォン

んんん





初アナルということもあって
事前準備に少しばかり時間はかかったが、
やってよかったな。
いまだにビクついている肛門を眺めながら、
満足感に浸る。

兄の嫉妬レイプ

「何を悩んでるんだよ」

「実は、クラスの男子にコクられちゃって……」

告白されたって、コイツが？

「わたし、コクられたのなんて初めてだし……
もう、どーすればいいーかわかんなくて……」

「……そんなの、断ればいだけだろうが」



「えー……でも……」

「でも、じゃないんだよ。

お前は小悪魔ガールを目指すんだろっ！

そんなやつと付き合ってる場合かっ！ 断れよっ！」

「ふえっ!? おにーちゃん急にどしたの?」

俺がこれだけ言ってるのに、なぜ頷かないんだ。

そんなに、そんなにその男と付き合いたいのかよ——

「この、言うことを聞けっ！」





「んふうっ……!!?
お、おにーひゃんっ……!!?」

「いゝからっ、っ、動くんじやならっ、っ。」

ドサッ

ぎゃ

ん

手早く両手を拘束し、ボールギャグを啜えさせる。

「はあ、はあっ、お前が誰のモノかわからせてやるっ……!」

「んんっ……」

「やら、やめへえっ……!」

「うう……」

「うるさいっ、黙ってろっ!」

自分でもよくわからない衝動に背を押されながら、モゾモゾとズボンを脱いでいき……。





まったく濡れていない膣内に、
怒張をズブズブと埋めていく。

「はあっ、はあっ……」

動くぞっ……!」

ずぶずぶ!!

「んん〜っ……!んんっ、んん〜っ……!」

張りついてくる膣壁やヒダをペリペリと剥がしながら、
ハメ慣れた穴に摩擦を与えてやる。

「んんうっ……んくっ……
んんうっ……んんううっ……」

「はあっ、はあっ……どうだ緒花あ、気持ちいいだろおっ」





首を振る緒花をキツと睨みながら、腰を動かし続けていく。

「んんーっ……!!
んんっ、んんんーっ……!!」
「嘘だっ! だったら早く
感じるように塗らせっ!」



「んっ、んんううっ……!!」

緩めに絞めていたマフラーを、
少しだけ引っぱってやる。

「お、おおっ……締まるっ……!
こんなにエロい身体してるくせに、んんの……!」

んん

んん

んん

んん

んん

叩きつけるような抽送をしながら、
マフラーを強く引っ張る。

「うっ……んうっ……」

「んぐっ……んううっ……!」

ぱんぱん!

んぐ

んぐ…

んぐ

んぐ

「お、おおっ……!?! す、凄い締めつけだっ……!」



これだけ締めつけているのだから、間違いなく緒花も感じていることだろう。

んっ...

んっ

んっ
んっ

んっ

「んっっっ……!!
んっっ、んっっっ……!!」

「はあっ、はあっ……!!
ああっ、らいぞお緒花っ……!!」

んっ



緒花も同時にイッてくれたようで、
膣だけでなく全身をガクガクと震わせていた。

「おっ、おっおっおっ……！」
しつかりと腰を密着させて、
ドクドクと子種を放っていく。

んっっ

ぶぶぶ

ぶぶぶ

んっっ



やはり、嬉しい。

もつと感じさせたくて、

ユルユルと腰を揺らしながら続いて精液を注いでいく。

ビクッ、ビクッ、と小さく四肢を痙攣させる緒花。

悶えるその姿を、俺は肉棒の脈動が落ち着くまで
見下ろしているのだった……。

……そして、それからしばらく。

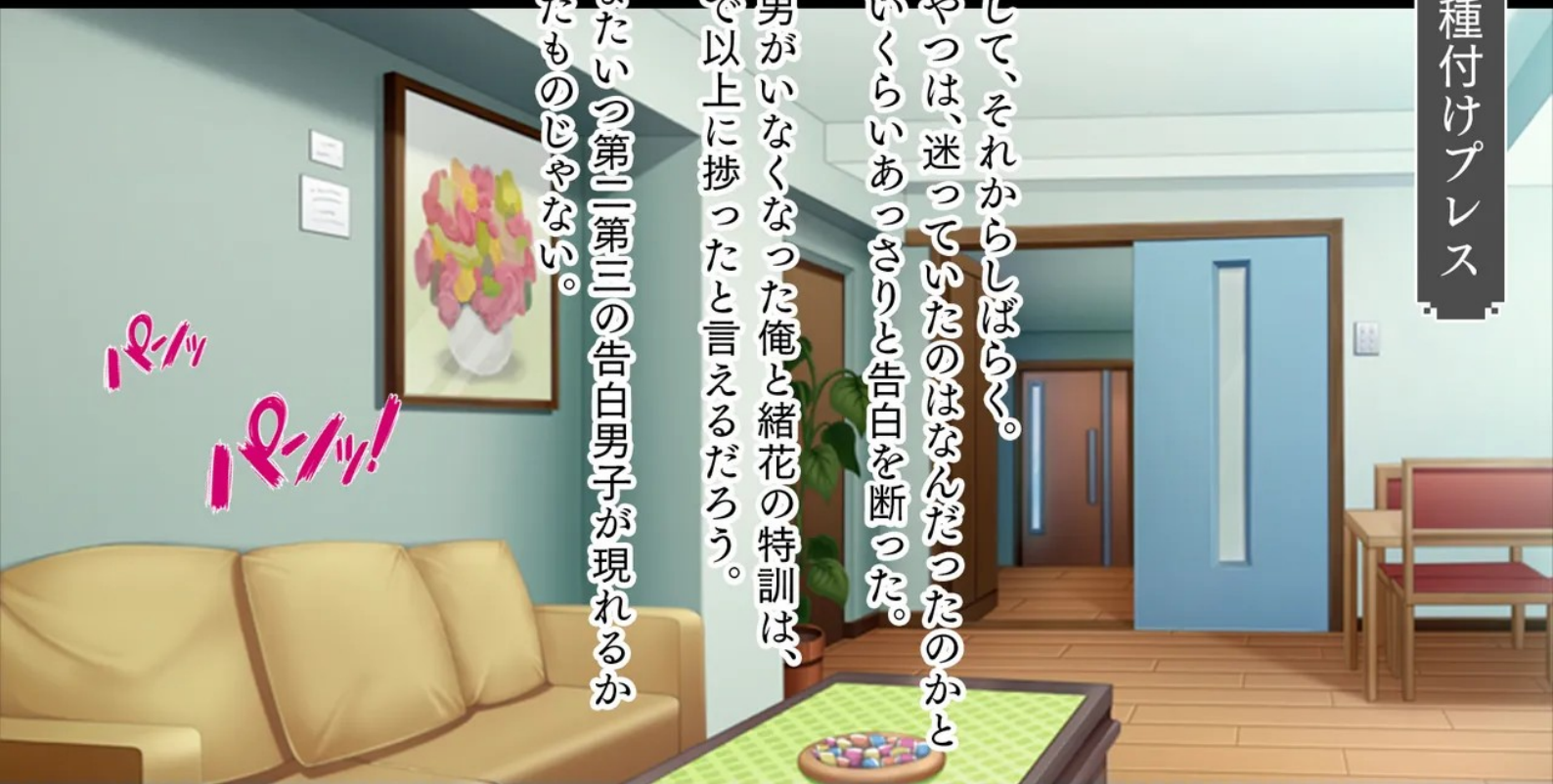
緒花のやつは、迷っていたのはなんだったのかと
言いたいくらいあっさりと告白を断った。

邪魔な男がいなくなった俺と緒花の特訓は、
これまで以上に捗ったと言えるだろう。

だが、またいつ第二第三の告白男子が現れるか
わかったものじゃない。

ハッ!

ハッ!





「あはあああああああ
ああああああああんっ！」

おあおあ

ズンズンズン

ズンズンズン

ズンズン



「ぐううううううううう……!!」

俺は一刻も早く緒花を快樂墮ちさせるべく、
あの手この手を使ってひたすらにやりまくった。

セックス
ドロドロ

「はあーっ……はあーっ……っ おどーちやあん……
もっかあいら……っ もっからしよお……ん」

「ん……」
「ドォォ」

「いっやっ……はあっ、はあっ……
流石にそろそろキツいんだがっ……」



ネット通販で注文していた怪しい媚薬が届いたので、
緒花が帰ってくるなり飲ませたのだが……。

ドロォッ

どろろ……

は

「おにーちやあん……お願い……♪
もっかい、だけでいいからあー……♪」

は

「いや……それに、もう縮んできたというか……」



「ほおらー……こうやってアソコで
キュンキュンっしてあげるからあー……♪
はやくボツキさせてえー……」

「くそっ……わかったよやっつてやるっ……」





やっ

「あはあんっ、きやあんっ……!!
そうっ、そうやっていっばい突いてえっ……!!」

「くううっ……!!」

次こそ緒花を満足させるべく、
がむしやらに腰をぶつけてやる。

はっ

んっ

んっ

んっ

んっ



「あんっ、ああんっ……!! もっとおっ……!!
もっと強くうっ……!!
もっと気持ちよくしてえっ……!!」

「こ、これくらいかっ……!?!」
「もっと潰していいからあっ……!!
あんっ、ああんっ……!!
おにーちゃんの重さでっ、
おもいつきり突いてえっ……!!」

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

はっ

あっ

「あ、ああっ！　いくぞっ……！」

「気持ちいいけどっ、
でもっ、もっと強くうっ……！」

「アソコ壊れちゃつていいからっ、
もっと気持ちよくしてええっ……！」

「ああっ、もっと感じさせてやるっ！」



「ぎゃあんっ……! さらり、これ気持ちさらさら……!
あんっ、ああんっ、あああんっ……!」

「くうううっ……! また、出そうだっ……!」

「いいよおっ、このままきでえっ……!
あんっ、ああんっ……!
わたしもっ、いっしょにイクからあっ……!」

あんな
あんな
あんな



んっ

んっ

「あ、あああつ……！ 出るうっ……！」

「きてっ、中出しザーメンいっぱい出してええっ……！
あんっ、あつ、あああ、あああああああ……！！！」



わっ

ズバァ!

じゅっ
ぽっ

じゅっ
ぽっ

ズバァ!

はっ

んっ

んっ



「あはああああああああああああああああああああんっ!!」

ひび

セツ

びび

びび

びび

お
あ
あ
あ

「……」


痙攣を繰り返しながら嬉しそうな声をあげていく。

「きてるうつ、ビューツで
熱いザーメン出てるうつ……！」

「あつ、あああつ……！ これつ、好きいつ……
おにーちゃんザーメン、大好きいつ……！」

「く……く……く……！」





好き、という言葉に胸が大きく高鳴る。
しかし、それはあくまで快樂に対して
言っているだけであって俺に言っているわけではない。

当たり前だろう、俺が、
そうなるように仕向けてきたのだから。
わかっているからこそ、虚しさも湧いてきて……。

切ない気持ちになりながら、
俺はドクドクと子種を注ぎ続けるのだった。

初詣は全裸&目隠しで散歩

ジャンパーを羽織り、靴を持って玄関へ。
待っていると、軽い足取りで緒花がやってきた。

「お待たせーっ♪ おにーちゃん、はやく行こっ」

「その前に……緒花には、これに着替えてもらおう」

靴から、とあるモノを取りだし緒花に見せる。

緒花は、俺が持っているものを見て「瞬だけ驚いたが――」

「……」

恥ずかしそうに、コクリと頷いた。



「マッパ……」

「この格好で行くの……？」

「ああ、不安か？」

ガッガッ

ドキッ

ドキッ

ドキッ

「当たり前じゃん……」

「こんな格好、誰かに見られたら
ハズすぎなんだケドお……♪」

言葉とは裏腹に、緒花が
ウツトリとした吐息を漏らす。



「はあ、はあ……♪ おにーちやあん、
こんなのゼツタイにヤバいってえ……♪」
「その割に嬉しそうだぞ？」

「だってえ……こんなの、エッチすぎる……♪」



「よし……らんぞんご主人様はらんぞん」

「はあ、はあ……はい、ご主人様あ……♪」



誰かに見つからないかと緊張しながら、
ゆつくりと移動する。そうして、向かった先は……。

おは

「はあ、はあ……んんっ……ご主人様……
ここ、どこですかあ……っ」

「秘密だ」

ザッ

キヨロキヨロと周囲を見渡しながら、少しずつ進む。

「あ、その……」

ドキ

ドキ

んっ

「あうしたっ」





「ご主人様、ごめんなさい……」

わたし、おしっこしたくなつてきちやいましたあ……」

「よし……見てらしてやるから、こころしろ」

ハハハ

あ

ヤミ……
き

「えっ……でも……外でなんて……」

「ほら、早くしろ。誰かに見つかるぞ」

「う、うう……ご主人様の命令に、従いますう……」

ががが

あ

あ

もじ

もじ

あ

そのまま、ピクピクツツと尻を震わせて……



「あぁっ、はぁぁぁぁぁ……♪」

「お、おおっ……」

ハッ

お、おおっ……

お、おおっ……

直冬の寒い空気だ、モワモワと湯気が広がってる。



「おしっこ、出てるうらうら……♪
外なのにつ、あはあつ、止まらないよおお……♪
あああああつ……♪」



ソクソクと震えながら、放尿を続ける緒花。

おっぱい

おっぱい

お尻

お尻

お尻

「はあ、はあ……♪ ご主人様あ……
おしっこ、終わりましたあ……♪」

「あ、ああ……緒花？」

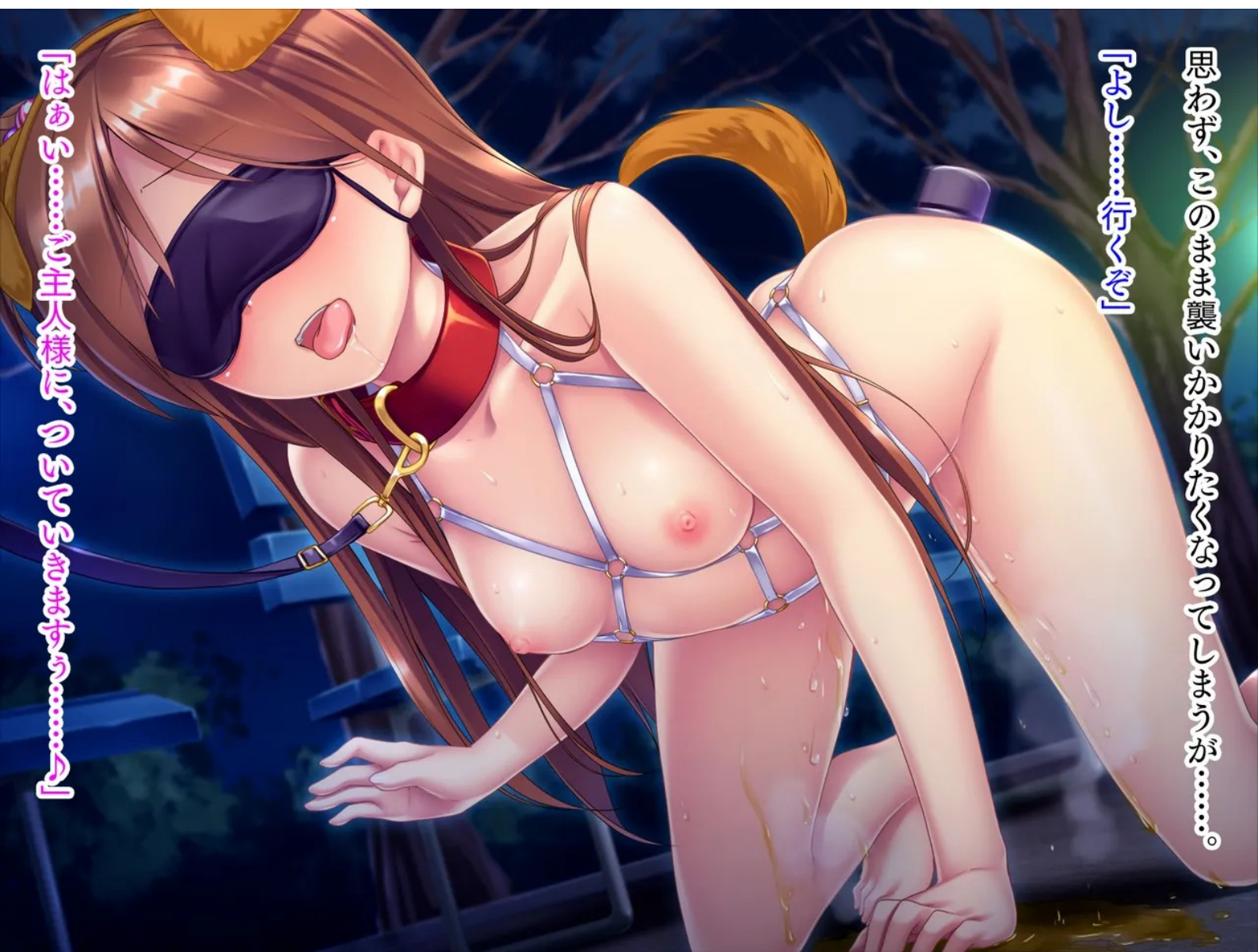
ちよろ

「あはあ……♪
ご主人様あ……♪ ポツキしてるう……♪」



思わず、このまま襲ひかかりたくなつてしまふが……。

「よし……行くぞ」



「はあら……ご主人様ごっつらでらきますら……」

—そうして、公園にある公衆トイレにやってきた。

「はあ、はあ……なんか、トイレのニオイするう……
ご主人様あ、ここどこですかあ……？」

ザーッ

「ニオイの通り、男子トイレだよ」



「ご主人様あ……♪ こんなどころに連れてこられて、
わたし、どーなっちゃうんですかあ……♪」

「よおし、まずは……こうだっ」

ザッ

おん

パイプの遠隔リモコンを取りだし、カチツと操作。
膣に入っているパイプの振動を、一気に最強へと変えた。



「ふあああつ……!?
やつ、なんでえつ……あつ、あああつ……!」

「ぐふふつ、振動がかなり強いタイプだから凄いだろう?」



「すじり、らげどおつ……! あつ、ふああつ……!
欲しかったの、これじゃなくてえつ……あつ、ああつ……!」



「イクなら、ご主人様がつ、いーですうっ……!!」

「好きなときにイッていいんだぞ?」

「やあつ、中出しがいいですうっ……!!
ご主人様の中出しザーメンでっ、
いっぱいイキたいですうっ……!!」

「ぐふふっ……よおし、いいだろう」



「イッてしまう前に、バイブの振動を止めてやる。
そのまま緒花の目隠しを外してやり、背後に回ると」

「はぁーっ、はぁーっ……ご主人様ぁ……きてえ……」

「挿れてやってもいいが、その前に約束しろ」

「はぁ」

「はぁ」

「しゃん…」

「するうっ……なんでも約束するから、はやくうっ……」



フリフリと尻を振ってねだってくる
緒花のすぐそばに立ち、スポンを下ろす。

「これを挿れてほしければ、
これからもずっと俺をご主人様にする
と約束しろ
一生、俺のペットとして従うんだ」

もど

もど



「するっ……約束するうっ……
一生、ご主人様のペットになりますうっ……!!
だから、はやくうっ……!!」

「よおし、言ったなっ?
約束を違えないように、
しっかり証拠を残しておく」



「あんっ……！」

「さらさらシッと……！」

あっ

はやる気持ちを抑えながら、
いそいそとペンを動かす。



「よし、次はこっちに……」

「なにしてるのっ？」

「……ふう、こんなものか」



卑猥な単語を書き終え、一旦離れる。
……おお、素晴らしい光景だ。

「はあ、はあ……
ご主人様あ、
はやくう……！」

種付けNO
おしんぼん
田舎

田舎

挿入済

「タトビ」
タトビ大好き

「まあ待て、証拠を残すと言っただろう」

パシヤツと、スマホで緒花の痴態を撮影する。

※おしんこさん
種はNO

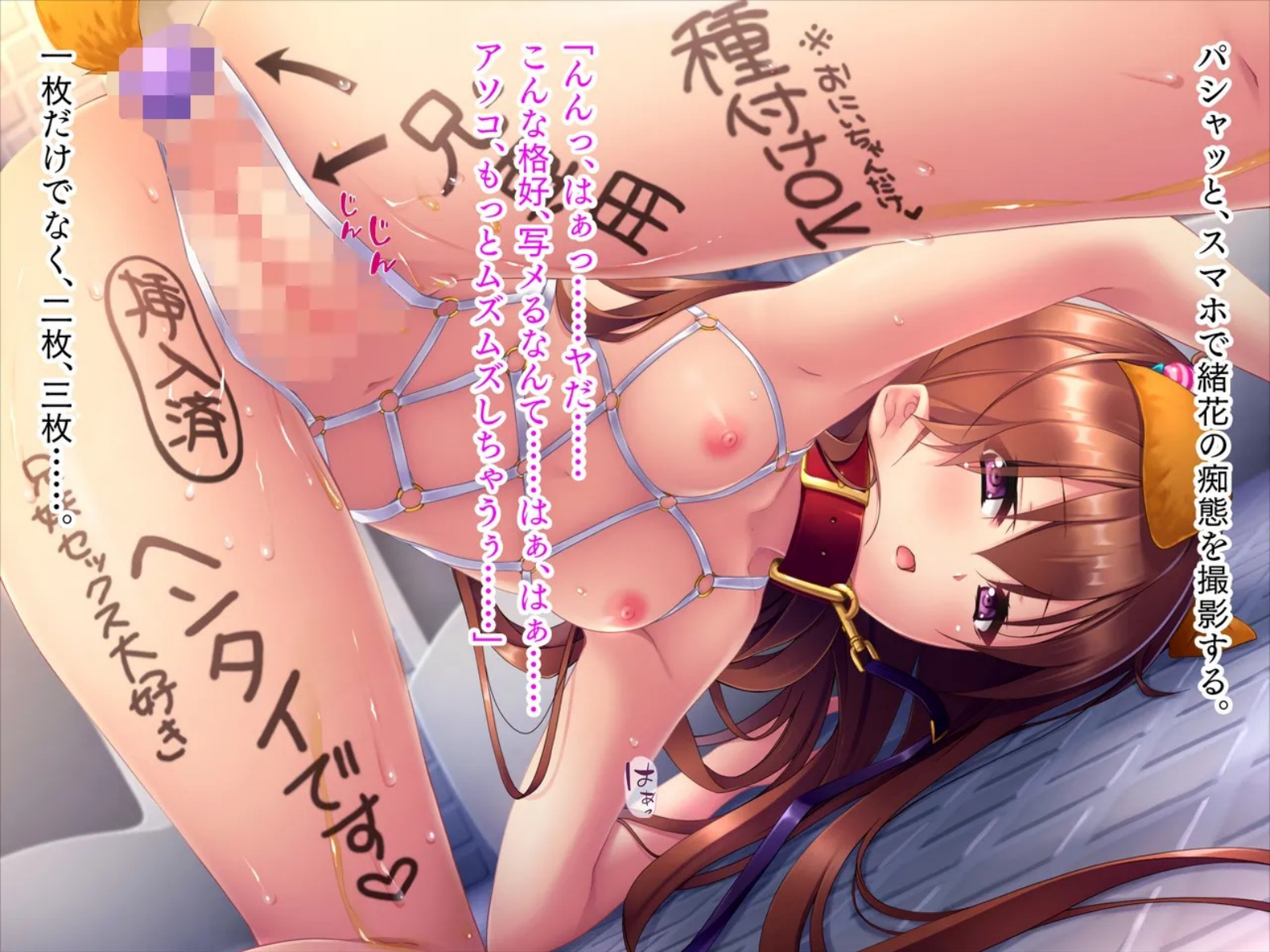
「んんっ、はあっ……やだ……
こんな格好、写めるなんて……はあ、はあ……
アツコ、もつとムズムズしちゃうう……」

じんじん

挿入済

「アトべお
お母さん大好き」

一枚だけでなく、二枚、三枚……。



「ご主人様あ、お願いしますう……もう、挿れてえっ……？」

……証拠はこれくらいでいいだろう。

種付けOK
※お尻に挿れたい

旦那様

じん

じん

挿入済

「わかった、いくぞっ！」
再び緒花に近づき、
今度はペンではなく
肉棒を近づけて――。

挿入済

お尻





「あはあああああああああああああああんっ……………」

「ううおおっ……………!?!」

あはっ

お風呂場!!

お風呂場

種々なTON
お風呂場

「こんなやつ、おつきすぎるよおつ……
アソコのお肉つ、巻き込まれちゃつてるっ……」

「ああつ、俺の形にしてやるからなつ」
「アソコつ、広がっちゃうっ……」
「ご主人様のつ、ヤバすぎるっ……」



「嬉しいらっ……ああんっ……♪
わたしのアソコっ、ご主人様のモノにしてえっ
……んはあっ、あはあんっ……♪」

種々なON
おんりんがんりん



「んはあっ、ふああっ……♪
ご主人様あつ……♪
もっとおつ……ひあんっ……♪
もつと激しくしてえっ……♪」

「よおし、もつと強くいくぞっー！」



「んはあああつ！ これっ、これえつ！
これがいいのおつ！ んひああつ！ あはあああつ！」

「R-1/2! R-1/2!

「まだ我慢しろよっ！
中出しでイキたいだろっ!?!」

種をたたく
おまんこ
田舎
あ

アトてあ

「ふあああつ！ きゃああんつ、ああああんつ！
ごしゅじんっ、さまあつ！ もうらめえつ！
ほんとにっ、らめれしゅううっ！」

種々なTON
おもしろい
田舎人

ぬちや...

ぬちや...

ぬちや...

「あつ、もうらいぞっ！
こっちも出してやるからな！」

田舎人





「んはあああああああああああああああああああああんっ!!」

「くはあああああああっ!!」

くはあ

種をたたく

エロッ!

エロッ!

びびるるる!!

アトにさる

アトにさる

「あはああああっ!!? しゅわろ、しゅわろのきこりゅわろー! あああっ、ああああっ!!? 奥でっ、バクハツしてらろろー! ひああああっ!」



ようやく落ちて着いてきたところで
ゆっくりと腰を引き……。



「はあーっ、はあーっ……
こんなの、しゅごしゅぎら……
マジで壊れるかと思ったあ……っ」

※お尻に貼って
種付けNO

田舎民

ドロオシ

ドロオシ

挿入済

「タトばあ
クマクマ大好き」

「はあ、はあ……ああ、俺もだ……っ」



「はあ、はあ……あ、スマホだあ……♪
わたし、こんな姿まで写められちゃうんだあ……♪」

「ああ、動くなよ……
んっ?」

※おしりから足先まで
種々なスマホ

←尻掛田

痺入済

んっ……

「タトビ」
大好き

スマホを取り出そうとして、動きを止める。
今、遠くから話し声のようなものが聞こえたような……。

やや遠くから、男たちの声が聞こえてくる。
しかも、確実にこっちに近づいてきているようだ。
こんなところ見つかったら、大事件だぞっ……!!!

そのまま、まだ足腰がガクガクしている緒花を抱えて、
大急ぎで公衆トイレから逃げだしたのだった……。

痺入済

「アト」はあ

姉心ヲク大好き

ラブホで妹と恋人セックス

「じゃ、シャワー浴びてくるねー」

「お、おら Ooooo」

俺の呼びかけを無視して、緒花は浴室へ向かってしまう。
すぐに、シャワーの音が聞こえてきた。

「……なんなんだ？」

……ああダメだ、なんだか落ち着かない。



「ふー、サッパリしたあー」
「はい、おにーちゃんもシャワー浴びてきてっ」
「お、その前話を」

「いーから行ってきてっ！」
「はやくっ！ はーやーくっ！」

「お、おう」

グイグイと押されるがまま、風呂場へ向かう。
いや、本言になんなんだ……っ？





「んっ、はあああつ……入って、きたあつ……！」

「くうっ……ああ、入ってるぞおっ……！」

ずぶっ

ずぶっ

ほっ


んっ

「お、緒花……俺にこんなことを言われても、
気持ち悪いかもしれんが……」

「ダイジョーブ、
わかってるよ……?
おにーちゃん、
わたしのコト好きなんですよ……?」


「なっ……!?!」





「兄妹だし家族だから、
ちゃんとした恋人とかにはなれないかもだケドー……
でも、ずーつといっしょにいてエッチするだけなら、
悪いコトじゃないでしょ……？」

「だからね、これからは……
おにーちゃんだけの女の子に、なってあげる……♪」



「でもね、わたしだっつて女の子だから、その……
フツのエッチもね、
してみたいなっつて思うんだよ……」

「だから、フツのエッチ、しよ……っ、そしたら、
これからまずっつといっしょにいてあげる……」

「ああ、するぞっ……！ 普通のエッチ、しよっ……！」

「うん……♪ それじゃ、照れてる同士で……
いっしょに、気持ちよくなる……？」

「っ……ああ、そうだな」

緒花の言葉に、胸がトクンと高鳴る。
俺はゆつくりと腰を動かしていく。

ぬちゃ..

ぬちゃ..



「んっ……はあっ、あっ……おにーちゃんが、
動いてるっ……あっ、んんっ……」

「はあ、はあ……
苦しくないか、緒花……？」

「ダイジョーブ、だよ……おにーちゃん、
優しくしてくれてるから……はあっ……
気持ち、いー……ふあっ」



「そうか……よかった……」

「おにーちゃんは、気持ちいい……？
んっ、はあっ……
わたしと、フツのエッチして……
感じてくれるっ……？」

「あ、ああっ……最高に、感じてるぞっ……」



「んんん……おにーちゃんの、
中でピクピク動らして……はあり、んんん……
もっとな動らしてもらーよお……っ！」

「いや……だって、
普通のエッチだろ……？」

「でも……んっ、はあっ……フツフツのエッチなのに、
ガマンなんてしてほしくないもん……っ！」

ぬぶ

ぬぶ

ズッ

あ

ほ

「それに……わたしもちよつとだけ……
んつ、はあつ……強い、ほしーかもだから……」

「だから、んんつ……
もつと、激しーの、して……？」

「緒花あつ……！
じゃあ、いくぞつ！」

ズズ

ニヤニヤ



「くぅぅぅ……！俺、もう出さうだっ……！
緒花はっ、まだ平気かっ……!?」

「わたしもっ、イキそうっ……！
あんっ、あぁっ……！
おにーちゃんといっしょにっ、
イキそうっ……！」

「じゃあ、
一緒にイこうなっ……！」

「うんっ、いっしょにっ……あんっ、きゃあんっ……！
2人で、いっしょにいっ……！ あっ、あああんっ……！」

あぁっ

あぁっ
あぁっ

はっ

あぁっ

あぁ

「はあっ、はあっ！ 緒花っ、出すぞおっ！」

「きてっ、中出しきてえっ！
あああんっ、きやんっ、
ひああんっ！ わたしっ、イクからあっ！
いっしょにおにーちゃんも出してええっ！」





「くはあああつ……!」

「あああああああああああああああつ……!!」

おあああ!

ヒクッ!

ヒクッ!

ムムムムムムムム

ムム

ムム

ム

「あつ、あああつ……！ おにーちゃんのセーエキつ、
出てるうつ……！ あつ、あああつ……！
ビューツで当たつて、染み込んできてるうつ……！」

「あつ」

「ああ、出てるぞおつ……！
緒花に出してるんだつ……！」



「あ、あああつ……!! おにーちゃんつ、好きつ……!!
大好きいつ……!! あつ、あつ、あああああつ……!!?」

おあつ

「くううつ……!!」

好き、という言葉に反応して小さな射精をしてしまう。
それを最後に、あとはゆっくりと快感の波は引いていった。



「はあ、はあ……♪ えへへ……
フツフのエッチ、しちやっただね……♪」

ふんっ

「あ、ああ……普通のエッチ、
しちやっただね……」

どろ…
ぬちゃ…

「これで……
おにーちゃんと、ずっといっしょだよだね……♪」



「お、緒花……」

「うん……なに、おにーちゃん……」

「俺……」

俺は、「生……」





勇気を出して、男らしい言葉を口にしてみる。
そんな精一杯の努力を、緒花は……。
これ以上ないほどの優しい笑みで
受け入れてくれたのだった。

妹と小悪魔コスセックス

それから、数ヶ月――。

「はあ、はあ……♪
おにーちゃん、まだいけるよねえ……?」

「う、うう……もう勘弁してくれえ……!」



もう何発も出してるといふのに、満足した様子はない。

『まだまだー……』 空っぽになるまで、
『ぜーんぶ搾りとつちやうんだからー……はあんっ……』

やっぱり普通のエッチじゃあ物足りなかったようで、
あれからも少し変わったプレイを求めてくるようになった。



今回は、サキユバスになりきって「枯れるまで搾り取る！」宣言をしてきたという流れで……。

「ほらあ、またギンギンにポッキしてきたじゃーん……♪んっ、はあんっ……♪これで、もっかいできちやうねー……？」

「緒花……明日も仕事だから、本当にそろそろ……！」

「だあーめ……♪あんっ、んはあっ……♪浮気しないよーに、しーっかり搾り取ってやるからっ……♪」



「浮気なんてできるわけないだろ……」

「そんなコト関係ないのー……♪
それじゃ、もっと激しくいくよおー……?」

「おちや
にゅにゅ」

「ちよっ、待っ」



「あんっ、あんっ、あはあんっ……!!
おにーちゃんザーメンっ、いっぱい擦れてるうっ……!!
グチヨグチヨ鳴つてて気持ちいいよおっ……!!」

「緒花、流石に激しっ……あぁっ!」

「だつてえっ、好きななんでもおんっ!」



わっ

「おにーちゃんとエッチするの好きだからっ、
いっぱいしたくなつちやうのおっ……!」

「お、緒花……くうっ!」

「あはああっ……! おにーちゃんのっ、

もっとおつきくなってきたあっ……!

あんっ……! 気持ちいーとこっ、

チヨ―擦れてるうっ……!」

はん
はん
はん

「緒花っ、こっちも動くぞっ!」

は

ち

「ああんっ！ いいっ、これいいっ！
あんっ、ああんっ！ 奥にズンズン当たってっ、
頭まで響らでびでるうっ！」

「まだあっ！ もっとっ、もっとしてえっ！
気持ちいいことっ、いいっばいしてえっ！」

おん
おん
おん

「ああんっ、いんぞおっ！ くううううっ！」

はっ



「いーよおっ、またいっぱい出してえっ！ あんっ、ああんっ！ わたしの中っ、ドロドロにしてえっ！」

「ああっ、もう駄目だっ！ 出るうっ！」

「きてっ、いつでも出してえっ……！」

わたしもっ、ちゃんといっしょにイクからあっ……！」

あっ、あっ、あああああああ……！」

あ
あ
あ
あ
あ

あ
あ
あ
あ
あ

わっ

はっ



「ああああああああああああああああああああああんっ!!」

「くっはあああああああああああっ!?!」

びしょびしょ!

びしょびしょ

びしょびしょ!!

びしょ

びしょびしょ!

ああああ!

緒花の膣奥に向けて、通算何回目かの中出しを放つ。

「あはあああつ……！ きてるっ、
おにーちゃんザーメンまた出てるううっ……！
これ好きいつ、好きいいいつ……！」



「あ、ああっ……俺も好きだぞおっ……!!
くっくっ……!!」

へトへトなくらい連続で出していたのに、
またしてもたっぷりと搾り取られてしまった。

は、



「はあ、はあっ……んふふー、お腹のなかドロドロお……♪」

「ああ……流石に、もういいだろ……？」

3/31♡

んふふ…

「えー、どーしよっかなあー……♪
おにーちゃんの、まだボツキしたままだしなあー……♪」





「ほらあー、またギンギンになったあー……♪
これなら、まだ出るよねえー……♪」
「ははは……うううー」

3131

ゆつくりと、緒花が腰を動かしました。
……なんというか、完全に手玉に取られている。

『朝まで、いっぱいしゃべって……♪』

そんなこんなで、毎日とにかく大変だが——。
まあ、こういうのも幸せだ……。

くおしまらるる

